

年間第三十一主日

2012.11.4

マルコ 12・28b-34

今年も11月の死者の月を迎え、今日は聖堂に入ったとたんにお気づきのよう
に、今日のミサがささげられる祭壇を覆うようにして、皆様からお寄せいただ
いた大切な方々のお名前が掲示されています。私たちの高円寺教会では、毎年
の恒例行事のように11月の死者の月の第一日曜日には、このように、皆様
にとって大切な、今は神さまのみもとに行かれた方々のお名前が掲げられた祭壇
でミサをおささげします。しかし、このようなことは、実は、一年に一度の特
別なことではなく、私たちがささげる教会のミサはいつもこのようにしてささ
げられているのです。私たちがささげるミサは、全てのものの創造主である神
がこの私たちの世界に遣わしてくださった神の子イエス・キリストがもたらし
てくださった救いに感謝してささげる感謝の祭儀です。私たちは神が遣わして
くださった神の子イエス・キリストの救いに与っている全ての人ともに、神の
救いに感謝して感謝の祭儀である教会のミサをささげているのです。今日この
祭壇にそのお名前が掲げられている方々だけではなく、今や神のみもとにあっ
てイエス・キリストがもたらしてくださった救いに与っている全ての死者たち
は私たちがささげるミサにともにいて、私たちのために、私たちよりもはるか
に清らかな感謝の賛美を捧げておられるのです。私たちは日曜日のたびにここ
に集って、この世の生を終えられて今やイエス・キリストとともに神のみもと
におられる方々ともに教会に伝えられてきたこの信仰の祭儀をささげているの
です。今年もこうして祭壇に、私たちにとって大切な方々のお名前を目に見え
る形で掲げさせていただくのは、私たちが信じていることのしるしなのです。
私たちのこの世のいのちは、私たちが信じている神の子イエス・キリストへの
信仰によって、神のみもとにおける永遠のいのちへと開かれているのです。そ
してそれは一方通行であるのではなく、イエス・キリストの復活が示している
ように、このミサにおいて復活のイエス・キリストが私たちとともにいてくだ
さるよう、今やイエス・キリストの復活のいのちの中におられる全ての死者
たちは、イエス・キリストとともに、このミサにおいて私たちとともにいてくだ
さるのです。私たちはその方々とともに教会の感謝の祭儀であるミサをささげ
ているのです。

私たちがささげる教会のミサは、この世の生を生きる私たちのために、この
世の生を生きる私たちと全く同じ一人の人間となってこの世に来てくださった

神の子イエス・キリストの十字架の死を記念する教会の信仰の祭儀です。イエス・キリストはその十字架の死によって、御自分が私たちと全く同じ一人の人間となられたことを私たちに示してくださっている神の子です。私たちは洗礼を受けることによって、聖書を通してキリスト教の教会に伝えられて来たこのような神の子イエス・キリストを信じる者たちとなったのです。

今日もこのミサの中で私たちが唱える、洗礼によって私たちが受け入れた信仰宣言は、私たちが信じている神の子イエス・キリストがどのようなお方であるかをこの世の生の中に生きる私たちに思い起こさせます。

私たちが信じる神の子イエス・キリストは、聖霊によって人となり、おとめマリアから生まれ、ポンティオ・ピラトのもとで苦しみを受け、十字架につけられて死に、葬られ、陰府に降り、三日目に死者のうちから復活し、天に昇って、全能の父である神の右の座に着いておられる私たち全ての者の救い主です。

イエス・キリストの十字架の死は、私たちがこの世において遭遇する経験の極致を示しています。この世の生の中で、私たちは確かにこの世界の現実の中に生きていますが、この現実の世界の中で自分がここに生きていることが、この世界にとってどれほどの意味があるのか、私たちがその中に生きている世界は応えてはくれません。イエス・キリストは十字架にかけられて、この世の生を終えられましたが、イエス・キリストのそのような死は、イエスがその中に生きられたこの世界の現実に対してどれほどの意味を持つものであったでしょうか。イエスが行われた奇跡を求めてイエスの周りに群がるように集って来た人々の姿は、イエスの十字架のもとにはありません。イエスがその心のうちの全てを語り聞かせたイエスの弟子たちの姿もそこにはありません。イエスはあの十字架の上で、それまでの親しい者たちとの一切の関係を失って、文字通り裸の一人の人間としてこの世の生を終えられたのです。神の子としてのイエスがそのいのちをかけてこの世界にもたらそうとしたものの一切を否定するこの世界の剥き出しの敵意に曝されて、イエスは十字架の上に死んで行かれたのです。私たちが信じているイエス・キリストはそのようなお方です。

そのようなイエス・キリストを私たちが救い主として信じているのは、私たちが、聖書を通して教会に伝えられてきたイエス・キリストの復活を信じる者たちとなったからです。イエスがその生涯をかけて告げ知らされた、イエスの父である神がイエスを復活させてくださり、その右の座に呼び寄せてくださったことを信じる者たちとなったからです。イエスはあのような死をもって、イエスが告げ知らせた全能の父である神がおられることを私たちに示してくださったのです。イエスの十字架の死が私たちに示しているように、私たちのこ

の世の生の意味は、この世界によって与えられるものではなく、イエス・キリストがその十字架の死と復活をもって示しているように、私たち全ての者のいのちの創造主である父なる神だけが私たちに与えることができるものなのです。私たちはイエス・キリストの十字架の死と復活を信じる者たちとなったことによって、私たちのこの世の生がこの世界に対して何の意味もない死をもって終わろうとも、死をもって終わるこの世の生に永遠の意味を与える、私たち全ての者の全能の父である神を信じる者たちとなったのです。

この世の生の中で、そのような神を信じる者たちとなった私たちは、私たちのこの世の生に永遠の意味を与えてくださった神に感謝し、神をたたえるために、私たちの教会に伝えられてきた信仰に基づくこの感謝の祭儀をささげます。この世の生を生きている私たちは、教会に伝えられてきたこの信仰の祭儀が意味していることを、まだ十分には受け止めきれしていません。けれども、この世の生を終え、イエス・キリストの救いに与っている死者たちは、このミサの中で私たちとともにいて、この信仰の祭儀が意味していることを、神のみもとから私たちに示しているのです。今日のミサの中で私たちは思いを新たにして、神のもとに旅立った死者たちが、神のみもとにおける永遠の安息のうちに迎えられるように祈りますが、神のみもとに迎え入れられた死者たちは、今や神の右の座におられるイエス・キリストとともに、私たちがこの世の生の中で受け入れた信仰が、それこそが私たちのこの世の生に真の意味を与える、神からの恵みであることを私たちに語りかけているのです。いつか私たちがこの世の生を終えて、神の永遠のいのちに迎え入れられるとき、私たちは、私たちに先立って神の永遠のいのちの安息に迎え入れられている全ての死者たちとともに、このミサが意味していたことをあふれる喜びのうちに、心からの感謝をもって祝うことができることでしょう。この世の生の中で、十字架上に死に、墓に葬られる、陰府に降り、三日目に死者のうちから復活したイエス・キリストを信じる者となった私たちは、それこそが、私たちのこの世の生に意味を与えるものであったことを、神のみもとに迎えられて全ての人々とともに、永遠の感謝と賛美をもってほめたたえることができるのです。これが、私たちが信じている信仰が私たちにもたらす希望の展望です。今日のミサの中で私たちが思い起こす、今や神のみもとに迎え入れられた死者たちが、このミサの中で、私たちたちとともにいて、この世の生を生きる私たちのこのような信仰と希望を励まし、力づけてくれるよう祈りたいと思います。

「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。隣人を自分のように愛しなさい」今日の福音に響くこの

みことばは、今やイエス・キリストとともに神のみもとにおられる、私たちの愛する死者たちの、この世の生を生きる私たちへのエールでもあるのです。それに気付く恵みを願って、このミサをおささげいたしましょう。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高